

# Graded Direct Method Teachers' Group

## News Bulletin

第 18 号 英語教授法通信 1966年11月1日

編集・発行・英語教授法研究会 事務局 東京都世田谷区豪徳寺 2-27-19 吉沢美穂方 Tel. (429) 5929

### 弱声のTHERE

三 上 章

There is... の疑問文は IS there...? である。これだけでも there を主語扱いたい誘惑を感じる。疑問文や否定文を少し並べてみよう。

Will there be a nice dessert this evening?

Are there any cherries left?

Can there be any doubt?

There can be no mistake.

There won't be time enough.

There does not appear to be much intelligence in this head.

No other little girl ever fell in love with you, did there?

こういう例を見ていると、誘惑はますます強くなる。そしてこの誘惑にブレーキをかけるような反例には出食わさない。

次の空括弧は関係代名詞の位置である。

This is the largest dictionary ( ) there is in the library.

...and Louise needed all the rugs

( ) there were to keep her warm.

(S. Maugham)

関係代名詞が省略されるのは主語でない場合であるから、空括弧の直後の there を主語と見なすのが自然である。逆に、when (he

was) young や if (there are) any のような従属節では、同様に括弧内の S+P が省略されるものと見られる。

このように there の形式化が進んでいるのであるから、それを一人前の主語と認めていい時期ではないかと思われる。先学たちもそれに、

Anticipatory Subject (Curme)

Introductory S (Kruisinga)

Vicarious S (Jespersen)

Formal S (Hornby)

などの名前を振り当ててはいるが、多くの名前のなすように、いわば不肖の子をしばしば認知したという気分があり、処理がうしろ向きである。前向きに、ただの主語にしてしまえないだろうか。

それには there それ自身の戸籍から正して行かねばならない。

弱声の there を第三人称の不変化代名詞とする。まず単複同形である。フランス語の ce (c'est, ce sont) のように、英語なら疑問代名詞 what, who などのようにである。次に、it のように主格と自的格とが合流しているものとする。ただし、所有格を欠く。there をこのように規定することは、多くの用例からの自然的帰結——のつもりである。

単複同形だから両様にはたらくが、やや単数に片よる傾向がある。

There is but we two. (Chaucer)

None of these people will help me;  
but there is you.

There's no first-class masters in this  
district. (Bennett)

There is a cock and five hens.

Youが実質的に一人である場合には必ず there is you となる。これはthereが第三人称であることから当然であろう。単複の問題には論ずべきことが多いが、それにしても、there を第三人称の主語ときめてかかったほうが便利であろう。複数の例も上げるだけは上げておこう。

There are five hens and a cock.

There have been some men killed by  
this storm.

There happen to be two foreigners  
in our class.

次に目的格としての用例を上げよう。語形の明らかな him の用語と対照させて示す。

Let him go his way.

Let there be light!

Let there be only one window open  
at a time.

It was impossible for him to go on.

It was impossible for there to be any  
more.

It was too late for there to be any  
taxis.

わたしにはこの解釈しか考えられないのであるが、普通には for there を何と説明しているのだろうか。

次は absolute の例である。分詞句の意味上の主語は主文の主語と一致しているが、一致しない場合は absolute nominative として残される。there は他のものに一致しようがな

いから、残るにきまっている。これもよく知られている例と並べて示す。

The sun setting, we went home.

There being nothing else to do, we  
went home.

There having been no rain, the  
ground was dry.

最後にちょっと変わった例が来る。これらは、もし there に所有格があればそれを使うところだろうが、どうも there の形に所有格まで認めるのは強引すぎるから、特別な absolute と見なすほかないようである。

On account of there being no money  
in the box...

No one would have dreamed of there  
being such a place.

このわずかな特例を除いて、there を代名詞にしまえば、以上の諸例すべて然るべく片がつくが、もしそうしなければ、一つ一つをただそういう文として説明抜きに押しつけられることになるのじゃあるまいか。

としたら、形式上せつかく首尾一貫性のある語法の取扱いとしては不備であろう。

すでに文頭の主語の位置が標準的であり、それから目的格や absolute の用法まで派生している there 構文を、倒置から説き起こすとは、もはや適切とは言われない。

1) A book is on the table.

2) On the table is a book. (倒置)

3) There is a book on the table.

これは、むしろ次の場合と平行的に考えたほうがいいと思われる。間接目的語を主語とする受身文は、もと倒置に由来するのであって、その経路を簡単のために現代英語の形で書いてみれば、次のようになる。

i) A book was given him.

ii) Him was given a book. (倒置)

iii) He was given a book.

(ii)から(iii)へ、同形の a bookがsubject から retained objectにクラがえてしまったのである。いわばウヤムヤのうちにそう変化したのである。それといくぶん平行的に、(2)の主語 a bookが、(3)においては一種の complementに、ただし概して不定の be-er であるような complement にクラがえしていると見なしたい。これとて、じつはかなり多くの人の潜在意識にある傾向にはっきり complement という名前を指定したにすぎないが…。

In these pictures, there are expressed very modern feelings.

To this list there may be added some others.

などを見ても、there は自由に先頭に立ちえることがわかる。それを一々倒置から導き出すのはいかにもまわりくどいという気がする。最初に戻れば、疑問文の作り方一つでも、倒置の結果を頭に置かれた there をあたかも主語であるかのように扱ってウンウンと言わなければなるまいが、あたかも……かのようにをやめたらいいというのである。

倒置は、副詞 there について言うことにしたい。

There goes the bell.

There comes the train.

の there は副詞(強声)であって、それゆえこれらは倒置の文であるが、

There comes a time when...

There came to Japan a foreigner.

の there は代名詞(弱声)で、だからこのままを正常語順と見ることにしたいのである。副詞と代名詞とはもはや別語と認めるべきだから、後者のスペリングを ther とでも改正されると、われわれ外国人にはありがたいのであるが。

代名詞 there の主語を認めることによって

主語の内包も変わってくる。主語は必ずしも actor ではなくなる。その大部分が actor (受身文では goal) であるということは変わらないけれども、それだけではなくなるから、主語の規定も変更しなければならなくなる。主語とは、平叙文において述語 (finite verb) を lead する名詞、というくらいなことになるだろう。ずいぶん消極的な規定のようであるが、もともと主語などはこの程度に規定しておくのがよかったと思う。

英文法の主語の大部分は有意味であるが、少部分は無内容な形式語である。表示すれば次のようになるだろう。

有意味 actor, goal (受身文)

半意味 generic (we, you, they, one)

無意味 a) it, b) there

大切なことは、有意味無意味を引くくめで、S + P がセンテンスの骨子をなしていることである。

付記——高原脩氏から貴重なお教示を受けたので、そのうち

W.F. Twaddell: The Eng. Verb Aux.

('65) 中の解釈を付記したい。

5. 4. 3... Unstressed "there" is a semantically empty, purely grammatical subject, fulfilling the English requirement for a subject of a verb. Most commonly it is the empty subject of the empty verb—the copula.

5.4.7. It is clear that unstressed "There" is to be classified as empty pronoun. It functions in the position of the subject—a familiar pronoun role. であり、unstressed "There" を代名詞とするのは Tag question の文においても他の代名詞と同様に起こるからだとのこと。

(大谷女子大学教授)

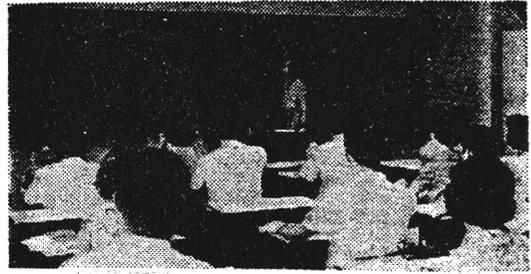
## GDM神戸セミナー

ことしのサマー・セミナーは7月25日から1週間、神戸の松蔭女子学院大学を会場にしてひらかれました。毎日、朝9時から午後4時まで、吉沢美穂さんの Theory、片桐ユズルさんの Practice Teaching を必修科目とし、さらにセイドー外国語研究所の Birch, Cosgrave, Rucinski 三氏による発音、大谷女子大教授、三上章さん、神戸アメリカ文化センター館長 Rimer さんなどの特別講演と美術映画、EP の Film 映写など、もりだくさんの内容が、夏のあつさとともに、つづきました。

最後の日は、大阪土佐堀の YMCA に会場をうつし、小学5・6年生のクラスに報徳学園の稲垣登子さんが“from”をおしえ、そのあと、活潑な討論がおこなわれました。

全日程を通じて、質問、討論のさかんなことが、こんどのセミナーの特長で、参加者のレベルのたかさをしめすものと思われまます。参加者約30名のうち、公立中学校9名、公立高等学校5名、私立中学校9名、その他となっています。地域的には、兵庫県を主とし、東は東京、西は九州というひろがりです。回収されたアンケートによれば、サマー・セミナーの存在は、主として学校への通知によってしられ、費用は大多数が公費と公費・私費両方となっています。セミナーを英語教育関係の雑誌その他から知ったひと、私費のひと、すでに GDM という教授法の存在を知っていたひとは、いずれも4~5人ありました。

つぎにアンケートから、おもな感想をひろってみます。



○ セミナーのうちでよかったプログラムは  
1. Practice Teaching  
2. Theory of Graded Direct Method  
です。

○ 最初「Gradingということが、何を意味するのか」ということが理解できなかったの、この Method 自体、何を目標としているのか、理解しにくかったが、Theory や Practice Teaching の講義を通し、わかりかけてきた。この Method で Grading ということが理解できなければ、Practice Teaching にしる、単なる Imitation に終わってしまうのではなからうか？

○ 外国語をできるだけ母国語を媒介とせず、にそのものとして教えていこうとする時にぶつかる、いくつかの壁をこの方法はとり除いているのに全く驚ろかされました。現行の教科書で英語を教えながら絶えず何かもの足りなさと共にたして英語を言葉として教えたのだろうかという不安感を持ちつつ現状維持を保っていたものに、新しい視野を広げてくれました。復習から新教材への導入の持って行き方、英語で考えさせる練習、読み書きに入る仕方、教授者の労力の減少（もっとも準備の点においては同じ）、英語への興味など考えさせられる点が多々あり応用してみたい気持です。

○ 6月頃に行なわれる講演などを中心にした例会を大阪でも行なってほしい。

○ 中級・上級はどのようにしていらっしゃるのですか。その実演を見せていただきたかったです。

## 大阪YMCAのGDM

岡部幸枝 (旧性三戸)

5月〇日だった。地下鉄肥後橋駅近くで「岡部さんの言葉は、もう関西なまりだね」「先生のように、専門家ではないですから、進歩的なのでしょうね」と冗談まじりにお話しして、お別れしたのが、GDM関西第1回当日でした。出席した会員は、主催された片桐先生と私、それにYMCA教育部主事の金城正男さんの三人だけ。

それでも、4月にやっと大阪に来たばかりで、不安な気持ちでいっぱいだった私にとって、GDMの例会に出席出来たことは、何よりも心強く、それ以上にGDM(片桐先生)がYMCAという組織の中に、実験クラスを持っておられたことが、うれしかった。例会当日は、薄暗い部屋で、金城さんの話を聞き、片桐先生の後から、ノコノコと講師室に入っていった。そこには年輩の講師のベテランの方々がおられた。しかしクラスの方は気持ち良かった。生徒は元気で、英語を口にするのが心から楽しいという表情であった。

以来、教授会などでお忙しい片桐先生の後をうけて、代講でここ土佐堀YMCAに出ること数回、顔なじみのない講師室にスーッと入る度に、例のベテラン先生方のしかつめらしい顔にひるむことしばしばであった。そのうちYMCAの若手講師の方々と話の出来る機会があり、小・中学生クラスの英語教授法について話が及ぶと、彼等が、片桐先生に尊敬の念を抱き、のみならず、特に小学生のクラスに於いては、生徒が全然減らない。父母会での父兄の評判が良い。子供達が本当に楽しみにしてクラスに出席している。などから、何んとかGDMに近づきたいとの気持ちを持っていることがわかり、GDMの会

員として、意を強くし、誇らしくさえ感じたわけである。こんな事と前後して、神戸でのサマーセミナーの準備がなされている頃、金城さんから、2学期からYMCAの専任にならないかという話が持ち出された。金城さん自身、英語教育に深い関心を持っておられるが、中学生以上のクラスについてはベテラン講師が多く、内容も教科書に基づいた受験準備的な形になっている。かねてより、小学生の入門クラスについては、発音練習の教材を作ってやってみたり、歌や物真似的な内容を入れてみたり、いろいろ試みたが、効果があがらず、どうも消化不良状態であつたらしい。ところが、片桐先生の授業を見られて、今までの悩みに解答を与えられたようで、GDMのクラス増設に、YMCAとして取りかかりたいとの意向であつた。

このこと以来、YMCAに非常に親しみがわいてきた。事務の人達も親切だし、こちらの好きなようにやれるし、それでいて、責任はYMCAが持ちますということで非常にありがたい条件になった。勿論、まだまだ研究不足である私には、GDMをもっと研究し人の手足を借りないで、自分の手でやってみたいとの気持ちを強くしている。神戸セミナーの大成功もあって、GDMは、YMCAの注目するところとなり、また関西GDMにとって、YMCAは、良き協力者となってくれると思う。これを背景に、関西の先生方とともに、勉強出来るよう願っています。

### 絵をつかつた文型練習

片桐ユズル

もう7~8年ぐらいまえになると思うが、月例のPracticeをEPをこまぎれにして、はじめから名簿のABC順にあてたことがある。そのとき、ぜんぜん liveの situation をつか

わずに、大きな紙にかいた絵だけをつかって授業をすすめたひとがいて、This is my method といったので、一同あぜんとしたことがあった。これは極端であるとしても、世間一般からは、われわれの方法は絵をつかう方法としてみられていることが多いらしい。

吉沢さんの「絵をつかった文型練習」も、じつはsituationによる文型練習なのだ、ということを読者にわかってほしいものである。

一方、升川さんや、ぼくなどは高校にいたものだから、いそがしさと、あいてが高学年であることと、それからEP教材のながれにみずからひたりきっていたために、その場その場でのinspirationをあてにし、無手勝流とかなんとかいって、いつのまにか絵をつかわない文型練習におちいってしまっていた。

Review, presentation, drill などすべてliveのsituationで、じっさいみずからコップを机においたり、生徒をドアにいかせたりしてやる。それがおわると黒板に字をかいたりしてreading, 練習問題をwriting, して最後にレコードでEPを読む、というような授業をしてきた。

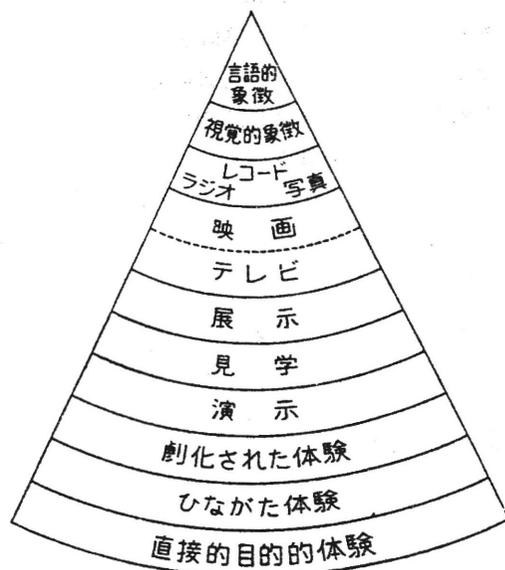
EPをしないときでも、教科書をするときでも、教科書のレッスンから文型をとりだして、それをsituationで練習し、教科書へもどれば、さっとはいれます。というようなことをいってきた。さっとはいれないのは生徒がいまままでの悪いくせがついているからだ、ということにしてきた。

しかし、吉沢さんからイスラエルでスライドがたいへん活用されているのを見てきた話を聞いたり、このごろまた小学生を教えたりして、絵の効用というものをみなおしはじめている。

子どもをたいくつさせないで、あるstructureを教えるということは、content wordsの数をふやすことよりも、むしろ抽象のレベ

ルのいろんな段階において、そのsentenceをつかってみるということかもしれない。つまり教室のなかでYou will go to the door. のようなことをやると、100%マスターするまで、それをやりつづけたら、すぐくたくつしてしまう。2~3の例を実演したら、こんどはきれいな写真などをみせて、The ship will go to America. というようなのを2~3やる。そうしたらこんどは黒板に絵をかいて、それから字をかく練習へうつる。つまりspoken language とじっさいのactionというナマの経験と、高度に抽象的な記号であるwritten languageとのあいだに、写真や絵による中間の段階をいれると、oralからreading, writing への移行がスムーズであるばかりでなく、goという概念も、教室のなかだけのせまくるしいものでなく、世界へも通用可能なのだというimaginationをしげきして、しっかり頭へはいる。Activitiesにも変化が付き、活気がでる。

視聴覚の方で神様みたいに偉いデールという学者が経験の三角錐で、いろいろな経験の抽象の程度をあらわしたことが参考になる。



おしらせ

恒例の公開講演会は6月18日(土) 1:30 p.m.から東京新宿厚生年金会館でひらかれ、講演は関西学院大学比嘉正範助教授が、最近アメリカの学習心理学について紹介したあと、吉沢さんがその応用とGDMについて話した。

授業実演では、まったく英語をしらない生徒にはじめて英語をおしえる第1時間目の授業を吉沢さんが小学5年生をあいてに、学習活動のきりかえのタイミングのよさで、生徒も聴衆をもあきさせないでひびった。升川さんは定時制高校生にどう教えるかでEPをつかってみせたが、彼自身ひじょうにすくなくしゃべるようになっていて、彼のようなベテランでもさらに進歩するものだ、ということをしめた。

サマー・セミナーは、神戸松蔭女子学院大学で7月25日~30日、約30名参加して成功のうちにおわった(P.4に関連記事)。  
○比嘉正範氏(関西学院大学助教授)が胃カイヨウのため7月に入院され、サマー・セミナーに出講されなかったのは残念でしたが、9月には全快、退院されました。

**Miss Christine Gibson** 転居。新住所は24 Lowell St., Cambridge, Massachusetts, USA.

EPの製本やサイズ、値段などについていままです教科書として生徒にもたせるには、いろいろ問題があったが、ちかく Addison Wesley という出版社から大判の分冊本が出ることになった。

**EP Book 2** のフィルムやテープが完成しているらしい。

大阪YMCAでは10月からGDMのクラスをひとつふやして岡部幸枝さんがもつことになった。4月からはじまったクラスと、半年ずれた進度のクラスができるので、見学や

Practice 希望者にとっては、便利になります。(関連記事、5ページ)

吉沢美穂さんはTECの幼児向教材つくり伊木英子さんの知恵をかりながら、はりきっている。

片桐ユズルさんはサマー・セミナー直前に新住所、神戸市垂水区西垂水町公団上高丸16-304に引越。セミナーがおわると、ベ平連(ベトナムに平和を! 市民文化団体連合)代表としてアメリカにとび、8月11日には東京にもどって日米市民会議に出席した。

升川潔さんはマスター論文 A study of syntax within a limited vocabulary と格闘中。そのため、

新年度役員は事務局、藤本一臣さん(練馬区上石神井1-387 Tel. 920-7470。つとめ先日大二高、Tel. 391-9700)。会計は小林祐子さん(渋谷区八幡通3-21-2王子代官山アパート、Tel. 461-7239)がひきうけることになりました。なお教材などGDM出版物は升川潔さん(東京都調布市佐須町955 Tel. 0424-82-8491)または松蔭女子学院大学英米文学科研究室(神戸市垂水区多聞町火ノ蔵Tel.078-76-0001)であつかります

会費をはらってください。わたしたちの研究会の会計年度は9月から8月までで、600円です。サマー・セミナー参加の方からはすでにいただいています。まえからの方はおわすれにならないよう月例会場でおはらいくださるか、本部・支部または会計まで、〒送(切手可)してください。あたらしい会員名簿をつくりましますから、転居、転勤、地番変更などは至急、本部までおしらせください。

本部 東京都世田谷豪徳寺2-27-19吉沢方鎌倉支部 神奈川県鎌倉市小町336 鎌倉婦人子供会館内  
関西支部 神戸市垂水区多聞町火ノ蔵409 松蔭女子学院大学英米文学研究室

*English Through Pictures, Books 1 and 2* ..... ¥ 220 each  
*First Workbook of English (大判)* ..... ¥ 240  
 (ポケット判) ..... ¥ 170  
*First Steps in Reading English* ..... ¥ 170  
*Teachers' Handbook for English Through Pictures* ..... ¥ 400  
*Anglophone Records for English Through Pictures, 1 and 2*  
 ..... ¥ 6,000 each  
*Filmstrips for English Through Pictures, Series 1 and 2* ..... ¥ 15,320 each  
 (海外注文)

チャールズ・E・タトル商会

神田店 東京都千代田区神保町1-3  
 TEL. (291) 7072  
 高島屋店 東京都中央区日本橋高島屋  
 6階 TEL. (211) 5029

好評

絵を使った文型練習

国際キリスト教大学講師 吉沢美穂著

英語入門期に視聴覚的な教授法が役立つことは論をまたないが、その効果的な用法は十分に研究されているとは言えない。本書の著者はハーバード大学のI・A・リチャーズ博士のもとで言語伝達の理論に基づいた英語教授法を学び、爾来十余年にわたる研究と実践を一冊にまとめた。ここに扱われた文法事項、語法、基本語は三百に及び、教科書の種類、学年に関係なく、ページを開けば絵を使った文型練習が得られる。練習の効果を高めるために初・中・上級別のワークブックを添えた。

中学校、高校、講習会、家庭での学習に最適

A5判函入(テキスト一冊  
 ワークブック三冊添付)  
 好評発売中 定価六五〇円

東京都千代田区神田錦町3-26 大修館書店 Tel(291)3961-5